尊敬関連感情概念の構造¹

——日本人大学生の場合——

武藤 世良^{2,3} 東京大学

The concept structure of respect-related emotions in Japanese university students

Sera Muto (University of Tokyo)

This study examined the semantic organization of “sonkei” (a feeling of respect) and respect-related emotion words such as “awe” and “admiration” in Japanese university students. Native Japanese university students rated the semantic similarity of 153 pairs of 18 respect-related words having been collected from synonym dictionaries. Hierarchical cluster analysis of similarity ratings revealed two main distinctions at the highest level of abstraction: “person-focus respect, emotional attitude” (sustained respect for a particular person considered to be superior) and “action-focus respect, emotional state” (temporal respect for a praiseworthy action). The former included three basic categories: (a) respect mingled with mild love; (b) idolatry (worship and adoration); and (c) respect mingled with fear (awe). The latter included two basic categories: (d) admiration and (e) respect mingled with surprise (wonder). The word “sonkei” was included in category (a). Also, multidimensional scaling revealed three dimensions of respect-related words: focus, valence, and self-oblivion. These findings suggest that for Japanese university students, respect is typically a kind of emotional attitude, but they sometimes experience respect as an emotional state (“state respect”).

Key words: respect, emotional attitudes, emotional states, emotion words, prototype approach.

The Japanese Journal of Psychology

2014, Vol. 85, No. 2, pp. 157-167

J-STAGE Advanced published date: June 1, 2014, doi.org/10.4992/jjpsy.85.13021

私たちは、日常生活の様々な感情的な文脈で、尊敬という言葉を用いる。師と仰げるような人物に出会ったとき、オリンピック選手が金メダルを獲ったとき、誰かが困難な状況にある人々のために力を尽くしていると知ったとき、私たちは、そうした他者の優れた性質や振る舞いに対して時に感極まり、“すごい”と尊

敬の念を抱くこととなる。このように、“尊敬”という言葉は、主観的情感 (subjective feeling) を表す感情語の一つとして捉えることができる。

これまで、尊敬 (respect) を感情として捉えてきた研究者が少なからず存在する (Kitayama, Markus, & Kurokawa, 2000; Kitayama, Mesquita, & Karasawa, 2006; Li & Fischer, 2007; Markus & Kitayama, 1991; Ortony, Clore, & Collins, 1988; de Rivera & Grinkis, 1986)。たとえば、Kitayama et al. (2000, 2006) は、いわゆる相互協調的自己観 (Markus & Kitayama, 1991) が優勢とされる日本人では、ふれあい、親しみ、尊敬といった、他者に焦点化した“対人関与的感情”を、“良い気持ち (good feelings)”として頻繁に経験しやすいことを明らかにしてきた。

また、欧米圏の心理学では、“respect”は感情としてよりも、社会的・態度的構成概念として扱われる傾向があるといえるが (有光, 2010; Frei & Shaver, 2002; Li & Fischer, 2007), Li & Fischer (2007) は、この点に関して感情の文化差を強調し、尊敬 (respect) を、

Correspondence concerning this article should be sent to: Sera Muto, Graduate School of Education, University of Tokyo, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0013, Japan (e-mail: sera_m@p.u-tokyo.ac.jp)

¹ 本研究は著者が東京大学大学院教育学研究科に提出した修士論文 (平成 24 年度) の一部を再構成したものである。なお、本研究の内容は日本感情心理学会第 21 回大会 (2013 年) 及び国際感情学会 ISRE2013 において発表された。

² 本論文の作成にあたりご指導いただきました遠藤 利彦先生 (東京大学) に心より感謝申し上げます。また、調査の実施にご協力いただきました川島 大輔先生 (北海道教育大学)、松元 健二先生 (玉川大学)、松元 まどか先生 (明治大学) に謝意を表します。最後に、本研究にご協力いただきました多くの学生の皆様にも心より御礼申し上げます。

³ 日本学術振興会特別研究員

義務尊敬 (ought-respect) と感情尊敬 (affect-respect) の 2 種類に分けて検討しており、前者は一人ひとりの価値や権利を認める社会的・道徳的・態度的構成概念であり感情ではないが、後者は称賛や憧れの要素を含んだポジティブな自己意識的感情であるとしている。さらに、中国語で義務尊敬は“尊重 (zunzhong)”という言葉に、感情尊敬は“尊敬 (zunjing)”という言葉に対応するとし、儒教道徳の影響を強く受ける中国人は、西洋人よりも感情尊敬を経験しやすいと仮定している。日本語でも“respect”が文脈によって“尊重”とも“尊敬”とも訳されることを踏まえると、この主張は示唆に富むものといえよう。

しかしながら、尊敬を感情的概念として捉えるには、少なくとも三つの問題がある。第一に、Li & Fischer (2007) が中国を典型的なアジア文化とみなし、中国での知見が、周辺諸国の日本や韓国にもそのままあてはまると論じていることである。実際には、同じアジア圏でも、日本と中国では“尊敬”の意味が異なる可能性が指摘されている (李・横山, 2002a, 2002b)。李・横山 (2002b) は、日本と中国の小学 6 年生に尊敬の意味を尋ねたところ、日本の子どもは“尊敬”を“すごいと思い、あこがれ、自分もそうなりたと思うこと”という意味で捉える傾向があったのに対し、中国の子どもは“人を敬う、礼儀正しいと思うこと”という意味で捉える傾向があったことを明らかにしている (李・横山, 2002b)。この知見から、尊敬の意味体系に関して、日本文化独自の部分を慎重に検討する必要があるといえる。

第二に、尊敬を一過性の感情状態として捉えるのか、それとも感情的態度 (emotional attitude: Ekman, 1992) の一種として捉えるのか、という問題がある。Li & Fischer (2007) は、感情尊敬を評価が変われば変動する感情状態として捉えている。しかし、特定他者を生涯にわたって尊敬し続ける人は現にいるわけであり、そうした長期にわたる尊敬は感情的態度として捉えたほうが妥当かもしれない。Ekman (1992) は、たとえば愛 (love) や憎しみ (hatred) といった感情語を感情的態度の例として挙げ、愛や憎しみは一過性の反応 (感情状態) というよりも、持続するものであるとしている。また、遠藤 (2006) は、感情的態度を“いわゆる好き・嫌い、憎悪・敬愛・思慕といった、個人がある特定の対象あるいは他者に対して一貫してとる感情的なスタンス”であると説明している。ここで、Li & Fischer (2007) の義務的態度としての尊敬 (義務尊敬あるいは“尊重”) が、相手のことを内心どう思っているかが、目上だから、そう振る舞うのが礼儀だから、といった様々な理由で、実際の主観的感覚に関わらず他者に敬意を示す性質のものであるのに対して、感情的態度としての尊敬とは、愛や憎しみのように心から感じる性質のものであり、両者は全く異なる概念

であることは注意しておく必要があるだろう。

第三の問題は、尊敬に関わる主観的感覚が複数存在する可能性である。たとえば、Li & Fischer (2007) は、典型的にポジティブな感情である感情尊敬と、頻繁に脅威性や恐怖を帯びる感情である畏怖 (awe: Keltner & Haidt, 2003) は近接しながらも異なる感情であると主張している。また、Li & Fischer (2007) の感情尊敬に酷似する感情的概念として、他者称賛感情 (other-praising emotions: Haidt, 2003) にも目を向ける必要がある。他者称賛感情とは、感謝 (gratitude) や道徳的高揚 (moral elevation: 他者の卓越した道徳性の評価によって生じる感情)、称賛 (admiration) など、他者の模範的で立派な行為の評価に際して生じるポジティブな感情カテゴリーのことであり、近年、欧米圏においてこれらの感情についての研究が急速に進展している (Algoe & Haidt, 2009; Haidt, 2003; Immordino-Yang, McColl, Damasio, & Damasio, 2009; Schindler, Zink, Windrich, & Menninghaus, 2013)。ここで特に注目すべきは、道徳的高揚や称賛といった一部の他者称賛感情経験がその感情を生じさせた他者への尊敬を引き起こす、という可能性が実証研究を通して示唆されていることである (Algoe & Haidt, 2009)。他者称賛感情を提唱した Haidt (2003) 自身は、“respect”をそもそも他者称賛感情の一つとして検討すべきであると主張したが (Haidt, 2003)、これまでの他者称賛感情研究において、“respect”がいかなる感情であるのか、また酷似する感情と思われる道徳的高揚や称賛との概念的・機能的差異はどこにあるのか、という問題に関しては、ほとんど不問に付されてきたと言っても過言ではない。とりわけ日本においては、欧米圏に比べて、他者称賛感情への研究関心や実証的知見はほとんど見当たらないことから、尊敬と他者称賛感情との関連は明らかになってはいない。

以上のように、尊敬が私たち日本人にとって経験されやすい感情の一つとしてこれまで仮定されてきたが (Markus & Kitayama, 1991)、恥や罪悪感、妬み、誇りといった他の社会的感情に比して、尊敬や尊敬を取り巻く感情にどのような性質や機能があるのかはほとんど明らかにされていない。そこで、本研究では、日本人の大学生・大学院生を対象に、尊敬がどのような感情的概念として捉えられているのかを探るために、尊敬に関わる日本語の意味論的ネットワークに着目し、尊敬という感情の性質の一端を明らかにすることを目標とする。

日本語には、敬愛、敬意、慕う、心酔、崇拜、畏敬、畏怖など、尊敬の類義語が数多く存在し、その多くの言葉が感情的ニュアンスを伴っているといえる。その中には、敬仰、崇敬、尊崇、畏服など、現代では使われないような言葉も多いが、過去においても現代においても、尊敬に関わる言葉 (以下、尊敬関連語とする) が数多く存在するということは、古来、日本文化にお

いて尊敬が、重要で細かく分化した形で認識される，“認知の精度がきわめて高い（hypercognized）”（Levy, 1984）感情の概念である可能性を示唆している。このことから、本研究では、畏怖や称賛、憧れといった、尊敬に関わる感情を，“尊敬関連感情”と捉えた上で、その概念構造を検討する。

ここで、日本文化一般における尊敬関連感情の概念構造を問題にするのであれば、多様な年齢や職業集団を含んだ大規模サンプルを対象に検討することが望ましい。しかし、本研究では、以下の理由から、大学生・大学院生に焦点化した検討を行うこととする。まず、尊敬に関する発達心理学的知見は少なく（有光, 2010）、私たちがいつから尊敬の気持ちを感じるようになるかは定かではないが、Kitayama et al. (2000, 2006)、Markus & Kitayama (1991)の研究から、少なくとも日本人の大学生は尊敬感情の経験頻度が高いことがわかっている。大学生になると、親や教師だけでなく、学科やサークル・部活動の先輩やアルバイト先の正規職員や上司など、目上の人と階層的な関係性を経験する機会が多くなり、それだけ他者に尊敬感情を抱きうる場面も多くなると考えられる。ここから、青年期後期にはそれ以前の児童期や青年期前・中期に比べて、尊敬に関わる概念表象が十分に形成されていると想定される。さらに、尊敬感情の経験には、優れた特定他者を役割モデルに据えた追従を促し、自己のポジティブな発達に大いに寄与する機能がある可能性が指摘されている（Li & Fischer, 2007）。このことから、自己の役割モデルやアイデンティティ、将来の進路や目標を模索する時期である青年期後期の大学生・大学院生を対象に尊敬関連感情の概念構造を検討する意義は大きいと考えられる。

本研究の目的と枠組み

本研究の目的は二つである。第一に、プロトタイプ・アプローチ（prototype approach: Li, Wang, & Fischer, 2004; Shaver, Schwartz, Kirson, & O'Connor, 1987; Shaver, Wu, & Schwartz, 1992; Shiota & Kalat, 2011）によって、日本人大学生における尊敬関連語の階層的意味構造を検討する。これまで特定の文化圏における感情語全体、あるいは恥などの特定の感情の概念に関して、その階層的意味構造を探る研究が数多くなされてきた（Li et al., 2004; Shaver et al., 1987, 1992）。プロトタイプ・アプローチは、プロトタイプ理論（Rosch, 1975, 1978）に依拠し、曖昧で定義の難しい概念の必要十分な定義を求めるのではなく、その“最良の例（best example）”は何かを問題にする（Shiota & Kalat, 2011）。このアプローチでは、カテゴリー体系に垂直的次元と水平的次元の2次元を想定する。垂直的次元では、カテゴリー同士は主に“上位（superordinate）”、“基本（basic）”、“下位（subordinate）”の三つのレベ

ルで樹形図のような階層の関係を示すと考えられる（Shaver et al., 1987）。私たちは通常、最も抽象的な上位レベル（たとえば、家具）や最も具体的な下位レベル（たとえば、座椅子）よりも基本レベル（たとえば、椅子）で事物をカテゴリー化し、心的に表象し、会話や思考を行っていると考えられる。一方で、水平的次元では、同じレベルでのカテゴリーの区分（たとえば、椅子、机、タンス）が問題とされ、そのカテゴリーを代表する最も典型的な例が問われる。そして、関連する事物のカテゴリー化の際には、その典型的な例（たとえば、プロトタイプの椅子）とどれだけ類似しているかが判断の根拠となる。

本研究では、憧れや畏怖、称賛といった、一つひとつの尊敬関連語を下位カテゴリーとみなしたときに、尊敬関連感情にはどのような基本カテゴリーがあるのかを明らかにし、その中で最も尊敬のプロトタイプのカテゴリーといえるものを同定する。本研究によって、たとえば中国での知見（Li & Fischer, 2007）と同様、少なくとも日本人の大学生にとって、日本語の“尊敬”と“尊重”が異なる概念として表象されているといえるのか、あるいは尊敬や畏怖、称賛といった感情語がどのように心的に体系づけられているのか、といった点が明らかになるだろう。

第二の目的は、日本人大学生における尊敬関連語の空間的布置を明らかにすることである。この観点からは、尊敬関連感情が快度（pleasantness）や覚醒度（arousal）といった、感情を少数の次元（dimension）で説明する Russell (1980) などの次元理論からも捉えられる概念であるのかどうかを考察する。

ここで、本研究の手順を簡単に述べる。本研究では、尊敬関連語を類義語辞典から著者が選定し、意味的な類似性の評定を回答者に求める、という手順で検討を行う。プロトタイプ・アプローチでは、対象となる100語前後の多くの感情語をカードに印刷し、協力者に自由に分類させる方法を用いるのが一般的であるが、この手続きでは協力者1人につき1時間程度を要する（Li et al., 2004; Shaver et al., 1987）。そこで、協力者の時間的・精神的負担を考慮し、先行研究（齊藤・中村, 2003; Tracy & Robins, 2007）を参考に検討する尊敬関連語は20語以内に収めた上で、類似性評定は一対比較法で実施することとする。

方 法

回答者

日本人の大学生・大学院生227名（男性72名、女性143名、不明12名：平均年齢20.9歳（ $n = 207$, $SD = 1.30$ ））を対象とした。東京都の国立大学1校、私立大学2校、北海道の国立大学1校の計4校を対象とした。質問紙を回収できた227名のうち、一対比較の

評定項目の過半数以上に回答した場合を有効とした。この基準から外れた 4 名を除き、有効回答者は 223 名（男性 71 名、女性 143 名、不明 9 名：平均年齢 20.9 歳 ($n=206$, $SD=1.31$)) となった。なお、質問紙のフェイスシートには性別や年齢のほか、回答者が留学生か否かを尋ねる項目もあったが、本調査において留学生と答えた学生はいなかったため、有効回答者は全て日本人（少なくとも日本語母語話者）であるとみなして検討を行った。

尊敬関連語の選定

以下の手順で尊敬関連語を収集し、類似度評定に用いる語を決定した。最初に、角川類語新辞典（大野・浜西, 1981）及びインターネット上の類義語検索サービスである Weblio 類語辞典（<http://thesaurus.weblio.jp/>）から、尊敬の類義語を網羅的に検索した。その際には、他者称賛感情の知見（Algoe & Haidt, 2009; Haidt, 2003）によって、理論的または潜在的に尊敬との関連が予想される語（たとえば、称賛、感激といった、他者の優れた行為や性質に対して経験される感情を表現すると思われる語）も積極的に収集した。類義語の収集の際には、意味的類似性が重なり過ぎないように心掛けた。

次に、この手続きを経て収集した数十語を、2011 年の 5 月から 6 月にかけて、予備調査として著者が所属する研究室の大学院生 11 名（男性 5 名、女性 6 名、平均年齢 23.5 歳）に呈示し、指摘された不適切な語（感情語としてのプロトタイプ性が明らかに低い語）や意味がわかりにくい語を削除し、新たに必要な感情語をいくつか追加した。その結果、尊敬及びその他 34 語を第一次尊敬関連語リストとして決定した（Table 1）。

最後に、第一次尊敬関連語リストの中から、次の基準で最終的な尊敬関連語リストを決定した。まず、多くのプロトタイプ調査において研究される事物（objects）と認知的に対応させるため（Shaver et al., 1987）、感情語を名詞に限定した。また、リストの中で日常的に重要であると考えられる語を積極的に残り、意味的類似性が重なり過ぎていると思われる語を削除した。以上の手続きによって選定した尊敬とその他 16 語に、義務的概念であることが予想される尊重を加え、本調査で用いる 18 語の尊敬関連語リストとした（Table 1）。

調査方法・調査時期

個別自記入形式の質問紙調査を、2011 年 12 月から 2012 年 1 月にかけて、各大学の教員の協力を得て実施した。東京都内にある三つの大学では著者が授業時間を用いて集団で実施した。北海道にある一つの大学のみ、調査協力を依頼した大学教員に委任して個別配布・個別回収により実施した。質問紙の表紙には、調査への協力は任意であること、大学の成績とは全く関

Table 1

第 1 次尊敬関連語リスト（34 語と尊敬・尊重の計 36 語）

崇める・憧れ^{b)}・畏敬^{b)}・畏縮・一目置く・畏怖^{b)}・敬う・畏れ・恐れ入る・恐れ多い・畏まる・感激^{b)}・感心^{b)}・感嘆^{b)}・感動・感服^{b)}・恐縮・驚嘆^{b)}・屈服・敬愛^{b)}・敬意^{b)}・敬服^{b)}・敬慕^{b)}・賛美・慕う・称賛^{b)}・心酔^{b)}・崇拜^{b)}・絶賛・尊敬^{b)}・(尊重^{b)})・脱帽^{b)}・謹む・尊ぶ・ひれ伏す・褒め称える

a) 50 音順。

b) 本調査で用いた尊敬関連語。

係がないこと、データは調査目的でのみ使用され個人情報保護されること、回答している途中でも気分が悪くなったら回答をやめてよいことが明記された。また同様の事項が口頭でも伝えられた。質問紙への回答時間は約 15—20 分であった。

調査手続き

調査では、呈示する語が尊敬の類義語、また感情語であることを教示せず、“言葉の意味に関するアンケート”として実施し、言葉どうしの意味の類似性について、回答者自身がどう思うかを尋ねた。

最初に、でたらめな類似性評定を防ぐため、尊敬関連語 18 語を 50 音順のリスト形式で呈示し、言葉の意味がわからないものについて指摘を求めた。なお、漢字が難しい言葉もあったため、18 語には全てルビを振った。

次に、“あなたは、以下の組になった言葉の意味が互いにどれくらい似ていると思いますか？”という質問により、一対比較法による評定を求めた。回答者は、各語の組合せ（たとえば、“尊敬と称賛”）について“全然似ていないと思う”（1 点）から“とてもよく似ていると思う”（5 点）の 5 件法で評定を行った。回答者が最初に“言葉の意味がわからない”と指摘した語の含まれる尊敬関連語の組合せについては、尺度とともに設けた“意味のわからない語がある”という欄にチェックをするよう求めた上で、類似性の評定は行わずに次の項目に進むよう指示した。

語の組合せの呈示順序の影響を防ぐため、質問紙は尊敬関連語 18 語 153 対の項目をランダム化した上で、組合せの順番を逆転させたものの 2 種類を作成し、カウンターバランスをとった。回答者はランダムに配布された 2 種類のうちどちらかの質問紙のみに回答した。

結 果

分析方針

有効回答者が“言葉の意味がわからない”と指摘した尊敬関連語とその人数、有効回答者に占める割合を Table 2 に示す。Table 2 より、敬慕・畏敬・畏怖・敬服・感服の 5 語は有効回答者の 20% 以上が“言葉の意味

Table 2
“言葉の意味がわからない”と指摘された語

尊敬関連語	意味不明数	割合 (%)
敬慕	83	37.2
畏敬	78	35.0
畏怖	66	29.6
敬服	46	20.6
感服	45	20.2
心酔	29	13.0
驚嘆	18	8.1
感嘆	17	7.6
脱帽	15	6.7
敬愛	3	1.3
称賛	3	1.3
崇拜	3	1.3

a) “意味不明数”は“言葉の意味がわからない”と指摘した有効回答者の人数。

b) “割合 (%)”は有効回答者 ($n=223$) に対する“意味不明数”の割合。

c) 憧れ・感激・感心・敬意・尊敬・尊重の6語に関して“言葉の意味がわからない”と回答した有効回答者はいなかった。

がわからない”と指摘し、これらの5語は今回対象となった大学生にとっては特になじみのない語であることが示唆された。

本調査において、意味のわからない語がなく、類似性評定153項目に全て欠損なく答えた者は81名（有効回答者の36.3%：男性24名、女性53名、不明4名）であった。分析に際して、敬慕や畏敬、畏怖といった、今回の対象者にとって意味が難解な語を除いて検討す

ることも可能である。しかし、本分析では、この81名を尊敬関連語の意味をよく理解する信頼の置けるサンプルとみなし、主にそのデータでの分析結果を重視して解釈することとする。

その理由は、本研究は大学生・大学院生を対象とした検討であるとはいえ、尊敬の類義語が日本語に数多く存在することに着目しており、今回の対象者にとって難解な語をいくつも除いて分析してしまうと、尊敬関連感情に関する潜在的かつ重要な意味体系を十分に捉え切れない可能性があるからである。また、意味が難解な語を除いた分析は、ともするとそれ以外の尊敬関連語についても浅い理解しか持たない回答者の類似性評定の結果が分析に含まれてしまうおそれがあり、不適切な分析結果を導きかねない。

したがって、これ以降は18語全ての意味的類似性について評定した81名のデータを用いた分析結果を中心に記載する。まず、プロトタイプ・アプローチにおいてよく使用される階層的クラスター分析 (Li et al., 2004; Shaver et al., 1987, 1992) により尊敬関連語の階層的意味構造を、次に非計量的多次元尺度構成法 (MDS) によりその空間的布置を検討した。分析の際には、それぞれの一対比較の評定値を平均し、項目対の類似度得点とした上で、この結果を逆転させて算出した非類似度を用いた。分析にはR 2.14.0を使用した。階層的クラスター分析ではhclust関数を使用し、ユークリッド平方距離を用いて、ward法で検討した。非計量的MDSではMASSパッケージのisoMDS関数を使用し、ユークリッド距離を用いて検討した。

ただし、これらの分析だけでは無論、有効回答者の4割弱（81名）のデータしか用いておらず、尊敬に関わる語彙が豊かな学生のサンプルに偏ってしまうた

Figure 1. 尊敬関連語18語の階層的意味構造 ($n=81$)

注) 図中の数字はクラスター間距離の大きさを示す。デンドログラム末端の尊敬と尊重の2語はゴシック体で表示した。

め、階層的クラスター分析に関しては、有効回答者の 20% 以上が“言葉の意味がわからない”と指摘した 5 語（敬慕・畏敬・畏怖・敬服・感服）を除いて補足的な検討も行った。

尊敬関連語の階層的意味構造

項目に欠損のない 81 名から得られた非類似度に対し、階層的クラスター分析を行った結果のデンドログラムを Figure 1 に示す。まず、クラスター間距離 50.03 でクラスターが大きく二分されており、この二つのクラスターが上位レベルを表すと考えられる。次に、クラスター間距離 12.29 で六つのクラスターが出現しており、この六つのクラスターが基本レベルを表すと考えられる。デンドログラムの末端には、調査に用いた 18 語が類似性の高いもの同士で結合して並んでおり、この部分が下位レベルであると考えられる。

上位レベル 上位レベルの二つのグループに含まれる言葉を検討してみると、敬愛や心酔、憧れなどが含まれる 11 語のグループは、全体として、特定の優れた人物に対して一貫して抱かれる尊敬を意味するものであることがわかる。それに対して、驚嘆や脱帽、感心などが含まれる 7 語のグループは、全体として、特定の優れた行為や出来事に対して一時的に生じる尊敬を意味するものである。ここから、前者の上位カテゴリーを“人物焦点尊敬・感情的態度”、後者の上位カテゴリーを“行為焦点尊敬・感情状態”と名づけた (Figure 1)。

基本レベル 基本レベルに関して、Shaver et al. (1987) を参考にクラスター内のプロトタイプ性 (prototypicality: Shaver et al., 1987) を算出し、クラスター (カテゴリー) 名を決定した (Table 3)。本研究では、(a) その尊敬関連語が含まれる基本カテゴリー内の他の尊敬関連語との類似度評定値の平均と、(b) その尊敬関連語が含まれる基本カテゴリー外の他の尊敬関連語との類似度評定値の平均を算出し、(a) から (b) を引いた値をプロトタイプ性として定義した⁴。そして、それぞれの基本カテゴリー内において、最もプロトタイプ性の高い尊敬関連語をその基本カテゴリー名とした。その結果、“人物焦点尊敬・感情的態度”の下には、基本カテゴリーとして、“敬愛”、“心酔”、“(尊重)”、“畏怖”が、“行為焦点尊敬・感情状態”の下には、基本

カテゴリーとして、“感心”、“驚嘆”が命名された (Figure 1)。なお、基本カテゴリーの下には、下位カテゴリーとして、さらに小さなクラスターが出現したが、含まれる尊敬関連語がそれぞれ 1, 2 語と少ないことから、本研究での考察の対象は基本レベルまでとする⁵。

尊敬関連語の空間的布置

同じく項目に欠損のない 81 名から得られた非類似度に対し、非計量的 MDS を適用した。Kruskal (1964) のストレス値 (1 次元解から順に、.31, .14, .07, .05, .04, ……) 及び解釈可能性によって、3 次元解を採用した。尊敬関連語を階層的クラスター分析で得られた基本カテゴリーごとにグループ分けした図を Figure 2 及び Figure 3 (3 次元解の第 2 次元と第 3 次元のみの散布図) に示す。

第 1 次元において、階層的意味構造の検討で見出された上位レベルの“人物焦点尊敬・感情的態度”と“行為焦点尊敬・感情状態”の尊敬関連語が明確に分かれていた (Figure 2)。このことから第 1 次元は上位レベルに対応し、“焦点化対象” (人物と行為のどちらに焦点が当たるか) を表す軸であると考えられる。次に、第 2 次元において、感心・称賛・敬愛といった言葉と畏怖という言葉が対称的に位置した (Figure 3)。感心や称賛、敬愛といった言葉は、ポジティブな主観的情感を表す言葉と考えられ、ネガティブなニュアンスが希薄であるのに対して、畏怖は“畏”と“怖”というどちらも恐怖という意味を表す漢字を含み、ネガティブな主観的情感であると考えられる。このことから、第 2 次元は“誘発性” (ポジティブか、ネガティブか) を表す軸であると考えられる。同じく Figure 3 より、第 3 次元において、心酔や感激という言葉と尊重が対極に位置していた。心酔や感激という言葉は、対象の美しさや素晴らしさに強く心が引きつけられ、夢中に

⁵ 結果のデンドログラムは省略するが、敬慕・畏敬・畏怖・敬服・感服の 5 語を除いた場合に、残りの 13 語 78 対の評定項目については回答できていた 160 名 (欠損値は平均値代入法で処理: 有効回答者の 71.7%) から得られた非類似度を同様の階層的クラスター分析で検討したところ、18 語全てを検討した場合と同様の結果が得られた。すなわち、まずクラスター間距離 41.18 で、“人物焦点尊敬・感情的態度”と“行為焦点尊敬・感情状態”の二つの上位カテゴリーが同じように確認された。次に、クラスター間距離 10.13 で五つのクラスターが出現し、デンドログラムの右から左の順に、“人物焦点尊敬・感情的態度”の基本カテゴリーとして“敬愛” (敬意・尊敬・敬愛)、“尊重” (尊重)、“心酔” (憧れ・崇拜・心酔) が、“行為焦点尊敬・感情状態”の基本カテゴリーとして“感心” (脱帽・感心・称賛)、“驚嘆” (感激・感嘆・驚嘆) が同じように確認された。このデータの場合には、畏敬と畏怖が除かれてしまうため、“畏怖”カテゴリーについては検討できないが、全体として 18 語全ての尊敬関連語を検討した結果との間に大きな差異が見られなかったため、81 名での分析結果の一般化に大きな問題はないと思われた。

⁴ Shaver et al. (1987) では、協力者に分類させた 135 語の感情語それぞれに関して、(a') 同じクラスター内における全ての感情語との平均同時分類数 (ある感情語とクラスターを同じくする他の感情語が、平均的に何回同じカテゴリーに分類されたか) と、(b') 自身が所属するクラスター以外の全ての感情語との平均同時分類数 (ある感情語とクラスターが異なる他の感情語が、平均的に何回同じカテゴリーに分類されたか) の二つの得点を算出し、(a') から (b') を引いた値をカテゴリー内の中心性 (centrality) あるいはプロトタイプ性の測度として解釈している。

Table 3
基本カテゴリー内のプロトタイプ性

尊敬関連語	a	b	P
敬愛			
敬慕	3.69	2.68	1.01
敬愛	3.68	2.53	1.15
敬意	3.80	2.76	1.04
尊敬	3.86	2.86	1.00
敬服	3.44	2.91	0.53
心酔			
憧れ	3.63	2.84	0.79
崇拜	3.76	2.88	0.88
心酔	3.62	2.56	1.06
尊重			
尊重	—	2.43	—
畏怖			
畏怖	3.14	2.34	0.80
畏敬	3.14	2.75	0.39
感心			
称赞	3.20	2.70	0.50
感心	3.44	2.45	0.99
脱帽	3.45	2.54	0.91
感服	3.41	2.81	0.60
驚嘆			
感激	3.26	2.43	0.83
感嘆	3.40	2.63	0.77
驚嘆	3.22	2.28	0.94

注) a = その尊敬関連語が含まれる基本クラスター内の他の尊敬関連語との類似度評定値の平均, b = その尊敬関連語が含まれる基本クラスター外の他の尊敬関連語との類似度評定値の平均, P = プロトタイプ性 (a-b)。

なったり気持ちが高ぶったりして対象に全神経が集中し、時に我を忘れて没頭する場面で用いられる。一方で、その対極にある尊重という言葉にはそうした熱中や興奮のニュアンスはなく、理性を働かせて相手を扱うことを意味するといえる。このことから、第3次元は“忘我性”（高いか、低い）を表す軸と解釈できた⁶。

⁶ 階層的意味構造の検討と同様、敬慕・畏敬・畏怖といった回答者にとって難解な尊敬関連語を減らして空間的布置を検討することもできるが、その場合には“畏怖”カテゴリーの語が除かれてしまうために誘発性の次元が十分に取り出せなくなると考えられる。そのため空間的布置の検討に関しては、尊敬関連語を減らした場合の検討は適当でないと判断し、18語全ての検討に留めた。

考 察

本研究の目的は、第一に、日本人大学生における尊敬関連感情の階層的意味構造を検討すること、第二に、日本人大学生における尊敬関連感情の空間的布置を検討すること、の二つであった。本研究の結果、少なくとも尊敬に関わる語彙が豊かな学生において、以下のことが明らかとなった。

日本人大学生における尊敬関連感情の基本カテゴリー

尊敬関連語の階層的意味構造を検討した結果、まず上位カテゴリーとして、“人物焦点尊敬・感情的態度”

Figure 2. 尊敬関連語 18 語の空間的布置 (n = 81)

注) 階層的クラスター分析で得られた基本カテゴリーごとにグループ分けした。尊敬と尊重の2語はゴシック体で表示した。

Figure 3. 尊敬関連語 18 語の誘発性と忘我性 (n = 81)

注) Figure 2 (3次元解) の誘発性と忘我性の2次元のみの散佈図。階層的クラスター分析で得られた基本カテゴリーごとにグループ分けした。尊敬と尊重の2語はゴシック体で表示した。

と“行為焦点尊敬・感情状態”の二つが見出された。前者は、特定の優れた人物像全体に焦点があり、比較的長期的に持続する感情的態度として解釈でき、後者は、他者の特定時点での優れた行為に焦点があり、比較的短時間で消失する一過性の感情状態として解釈できる。そして、前者においては、“敬愛”、“心酔”、“(尊重)”, “畏怖”が、後者においては、“感心”、“驚嘆”が基本カテゴリーとして存在する可能性が示唆された。ここで、“尊重”は尊重 1 語で単独でクラスターをなしており、予想された通り、尊敬関連“感情”としてよりも義務的概念として捉えるのが妥当であると考えられる。プロトタイプ理論においては、人は基本レベルで事物をカテゴリー化し、会話や思考を行うと仮定されているため (Rosch, 1978), “尊重”を除いた五つの基本カテゴリーが、日本人大学生における尊敬関連感情の日常的な概念化であると考えられる。以下、それぞれの基本カテゴリーについて考察する。

“敬愛” “敬愛”カテゴリーの語は全て“敬”という漢字を含み、敬慕や敬愛という言葉もそこに含まれている。また、尊敬という言葉自体はこのカテゴリーに含まれた。ここから、“敬愛”は自分よりも優れた特定人物を一貫して敬い慕うような、ポジティブで比較的穏やかな愛情に似た主観的情感と考えられ、日本人大学生にとっての尊敬のプロトタイプの情感であることが示唆された。また、日本人大学生にとって、尊敬は典型的には一過性の感情状態というよりも特定他者への一貫した感情的態度 (Ekman, 1992; 遠藤, 2006) として捉えられている可能性が示唆された。

“心酔” 心酔, 崇拜, 憧れの 3 語を含んだ“心酔”は“敬愛”の最も近くに位置していたが、“敬愛”よりも忘我性が高く (Figure 3), 穏やかな情感というよりも自己が理想とする遠い人物に没頭し、時に一体化を願うような情感であることが推測された。“心酔”は日本人大学生にとって、優れた特定他者に夢中になる熱烈な尊敬感情を意味すると考えられる。

“尊重” “尊重”には尊重の 1 語のみが含まれた。比較的“敬愛”と“心酔”に近い位置にあったものの、空間的布置の検討からは、他の尊敬関連語と比べて、尊重という言葉の忘我性が著しく低いことが明らかとなった (Figure 3)。“尊重”は理性によって相手を丁寧に扱うことを意味し、生理的な興奮がほとんど伴わない概念であると考えられる。Li & Fischer (2007) と同じく、日本語の“尊重”も、中国語の“尊重 (zunzhong)”のように、少なくとも日本人大学生にとっては感情的概念ではなく、他者の存在を価値あるものとして認める義務的概念であると捉えられていることが示唆された。

“畏怖” “畏怖”は、“人物焦点尊敬・感情的態度”の下位概念として出現した。空間的布置の検討では、“畏怖”に含まれる畏怖、畏敬は比較的ネガティブな

誘発性を持っており、どちらも“畏”という漢字が使われていることから、単に目上の他者を敬うだけでなく、その偉大な性質に圧倒され、近寄り難さや脅威性、恐怖のニュアンスを伴うといえる。“畏怖”がネガティブな情感であることは、畏怖 (awe) には時に脅威や恐怖が伴うという先行研究の考察 (Keltner & Haidt, 2003; Li & Fischer, 2007) と整合的である。この結果から、尊敬関連感情にはポジティブな感情だけでなく、ネガティブな感情も含まれる可能性が示唆された。ただし、今回の調査では、畏怖も畏敬も 3 割前後の有効回答者が“言葉の意味がわからない”と指摘し、大学生・大学院生にとっては“畏怖”が理解の難しい概念カテゴリーであることも示唆された。

“感心” “感心”は“行為焦点尊敬・感情状態”の下位概念として出現し、感心・脱帽・感服・称賛の 4 語を含んだ。これらの言葉は、長期的に持続する情感を意味するものというよりも、他者のその時点での優れた行為や技能なりに心を動かされ、尊敬を感じる、という一過性のニュアンスを含んでいることがわかる。このことから、少なくとも日本人大学生において、優れた行為に対する“状態尊敬”と呼べる感情状態の存在、すなわち、一過性の感情状態としての尊敬の存在が示唆されたといえ、理論的に非常に興味深い結果といえる。さらに、“感心”は英語の感情語 admiration の訳語として用いられることが多い称賛 (賞賛) という言葉を含んだことから、日本人大学生にとっての他者称賛感情に関する知見はほとんど見当たらないといえ、“感心”に含まれた情感について、大学生以外の年齢・職業集団も対象にして今後さらに検討することで、日本におけるこの分野の研究が進められていく可能性がある。

“驚嘆” 驚嘆, 感激, 感嘆の 3 語を含む“驚嘆”は“感心”と同様、日本人大学生において、“行為焦点尊敬・感情状態”の下位概念として出現した。最もプロトタイプ性の高い驚嘆には“驚”という漢字が含まれていることから、他者の優れた行為や技能に対する驚きがこの基本カテゴリーの中核的な意味であることが示唆された。また、空間的布置の検討では、“驚嘆”は“感心”よりも忘我性が高いことが明らかとなった (Figure 3)。どの言葉も“嘆”や“激”という漢字を含んでいることから、“驚嘆”は生理的に興奮し、時に我を忘れるほど対象に没頭する状態であると考えられる。ただし、“驚嘆”は尊敬という言葉が含まれた“敬愛”とは最も距離が遠く、大学生にとって、尊敬関連語の中で最も尊敬と異なるカテゴリーとして捉えられている可能性が示唆された。“感心”カテゴリーの言葉が限定的に人にしか用いられないのに対し、“驚嘆”カテゴリーの言葉が人以外の自然的事物・事象に

も頻繁に用いられることは注目に値する差異といえる。たとえば、私たちは“大自然に驚嘆する”と言うことはあっても、“大自然に感心する”とは言わないだろう。

日本人大学生における尊敬関連感情の空間的布置

尊敬関連語の空間的布置においては、相対的に語彙の豊かな学生に限られた知見ではあるが、焦点化対象、誘発性、忘我性の三つの次元が見られ、これまでのRussell (1980) などの次元理論の知見と部分的に整合する結果が得られた。たとえば、Russell (1980) は様々な感情語を多次元尺度構成法により検討し、快度と覚醒度の2次元の組合せで主観的情感の全ては説明できるとしている。本研究で尊敬関連語に関してRussell (1980) と同様の手法を用いて検討し、誘発性の次元が得られたことは、日本人大学生において尊敬が感情的概念として捉えられている可能性を示唆するものといえよう。一方で、焦点化対象と忘我性の次元は尊敬関連感情に特有のものである可能性が示唆された。特に、焦点化対象の次元はその尊敬関連感情が特定人物に対する持続的なものか、あるいは特定行為に対する一過性のものか、を分ける次元と解釈でき、これまで先行研究で議論されてきた、尊敬 (respect) を感情とみなせるかどうか、という問題を考える上でも非常に興味深い。本研究から、直ちにその問いに明確な結論が下せるわけではないが、少なくとも日本人大学生にとって、尊敬は典型的には感情的態度として捉えられ、時に“状態尊敬”としてすら経験される感情的概念であることが明らかとなったといえる。

また、本研究では明確な覚醒度の次元は見られなかったが、尊敬関連語には驚嘆や感嘆、畏怖といった、覚醒度の高いと思われる語も存在する。このことから、尊敬関連感情に焦点化した場合、主要な次元としては覚醒度が取り出されないとしても、尊敬の覚醒度に関しては、今後も検討する余地はあると考えられる。

本研究の限界と今後の課題

以下、本研究の限界を三つ挙げる。第一に、本研究の対象は日本人の大学生・大学院生に限定されたものであり、本研究の知見を日本文化や日本人全体に一般化することには困難が伴うだろう。また、分析では尊敬に関わる語彙が豊かな学生の結果を重視して解釈したため、本研究の結果が、相対的に尊敬に関わる語彙が限定されている大学生にあてはまるかどうか、今後追試的検討を重ねて確認していく必要がある。とりわけ、“畏怖”カテゴリーの語は今回の対象者にとって難解な言葉として指摘されることが多かったことを踏まえると、当初の予想とは異なり、多くが青年期後期の若者である大学生や大学院生の段階では、まだ尊敬に関わる概念の意味表象が形成途上である可能性が

ある。今後は幅広い年齢や職業集団を対象に同様の調査を行い、今回得られた知見が現代の日本文化において一般化可能なものなのか、それとも大学生に特徴的なものなのかを精査していく必要がある。さらに発展的な課題として、日本国内に留まらず、他国や他の文化圏でのデータの収集を行い、尊敬関連感情の概念構造を比較文化的に検討することも挙げられる。これまで、感情語へのプロトタイプ・アプローチは多くの文化圏でなされ (Shaver et al., 1992)、感情の階層的意味構造に関して文化間の類似性と差異性が精力的に検討されてきた。他の文化圏においても、尊敬が行為に焦点化した感情状態と人物に焦点化した感情的態度の二つに大きく概念的に区別されるのかどうか、あるいは“敬愛”や“心酔”といった基本カテゴリーが見られるのかどうか、といった問題は検討する価値がある。また、もし他の文化圏と比べた場合に、日本語の尊敬関連語の数が現実的に多いのであれば、日本文化において尊敬が“認知の精度がきわめて高い” (Levy, 1984) 感情的概念であることをより説得的に示すこともできるだろう。

第二に、本研究では、回答者の負担を考慮したためとはいえ、尊敬の類義語全てを網羅的に検討できたとは言いがたい。そもそも今回作成した尊敬関連語リストが実際、尊敬に関わる感情的概念を適切に表しているかどうかに関しても、事前にプロトタイプ性評定を行ったわけではないため、明確ではない。本研究の尊敬関連語リストが妥当なものかどうかも含めて、今回検討できなかった語を、今後検討する必要があるだろう。ただし、尊敬関連語を増やして検討したとしても、それらの語が一般的な大学生に意味が了解可能な単語として必ずしも認識されていない可能性も、本研究では明らかとなった。たとえば、“慕う”という言葉は大学生でも日常的によく使うと思われるが、“敬慕”となるとその言葉の意味がわからないと指摘する有効回答者が4割弱にのぼり、文脈なしで漢語が与えられる状況は難しかったと考えられる。プロトタイプ調査では一般的に名詞が使用されるため (Shaver et al., 1987)、今回の検討では“敬慕”とせざるをえなかったが、このように本研究で作成した尊敬関連語リストが、大学生が日常的に用いている言葉ではなかったかもしれない点は、特に注意すべき点であろう。こうした問題点に対しては、辞書からの網羅的収集という方法ではなく、“尊敬”という語を刺激語にして、大学生に類似する感情語をリストアップしてもらう、というようなボトムアップな方法により再検討することが望ましいと考えられる。

第三に、本研究では尊敬関連語に焦点化して検討したため、喜びや愛情、感謝、恥、恐れ、羨望といった、潜在的に尊敬関連語との意味的類似性が予想される他の感情カテゴリーとの関連を探ることができなかつ

た。したがって、尊敬関連感情が、私たちが心的に表象する全ての感情的概念の中で、どのような階層的意味構造や空間的布置をなしているかは定かではない。とりわけ、尊敬関連感情は多くの場合、対人状況で経験される社会的感情であると考えられるため、関係性の視点が欠かせないであろう。感情の理論においては、これまでも自己と他者の関係性を感情の中核的な要素とみなすアプローチ (Kemper, 1991, de Rivera, 1977; de Rivera & Grinkis, 1986) が存在してきた。たとえば、de Rivera & Grinkis (1986) は、感情を社会的関係性としてみなす構造的理論 (de Rivera, 1977) の視座から、複数のポジティブ感情の主観的情感の類似性を多次元尺度構成法に適用し、尊敬 (respect) や称賛 (admiration) といった、本研究における尊敬関連感情とみなせる感情状態と、愛情 (love) や誇り (proud) といった他のポジティブな感情状態との空間的布置を検討している。これらの研究から、尊敬や称賛が自己よりも他者に焦点化した感情状態 (“it” emotions) であることなどが理論的・実証的に示唆されている。こうした先行研究を踏まえた検討は、社会的感情研究全体の発展にも結び付くであろう。

また、たとえば感情語全体の中での尊敬関連語の階層的布置を検討した場合には、尊敬の中核的概念は“敬愛”のみで、“畏怖”は恐れの下位概念として、“驚嘆”は驚きの下位概念として認知されている、といった可能性も十分考えられる。“敬愛”、“心酔”、“畏怖”、“感心”、“驚嘆”はどれも本当に尊敬関連感情の基本カテゴリーとして考えてしまってもよいのだろうか。尊敬の感情心理学的研究は少なく、本研究では“尊重”以外の基本カテゴリーを全て尊敬関連感情として捉えたが、どこまでが尊敬“関連”語といえ、どこまでが尊敬“関連”感情といえるのかに関しては、今後慎重な検討が必要といえるだろう。

引用文献

- Algoe, S. B., & Haidt, J. (2009). Witnessing excellence in action: The ‘other-praising’ emotions of elevation, gratitude, and admiration. *Journal of Positive Psychology*, **4**, 105–127.
- 有光 興記 (2010). ポジティブな自己意識的感情の発達 心理学評論, **53**, 124–139.
- (Arimitsu, K. (2010). Development of the positive self-conscious emotions. *Japanese Psychological Review*, **53**, 124–139.)
- Ekman, P. (1992). An argument for basic emotions. *Cognition & Emotion*, **6**, 169–200.
- 遠藤 利彦 (2006). 感情 海保 博之・楠見 孝 (監修) 心理学総合事典 朝倉書店 pp. 304–334. (Endo, T.)
- Frei, J. R., & Shaver, P. R. (2002). Respect in close relationships: Prototype definition, self-report assessment, and initial correlates. *Personal Relationships*, **9**, 121–139.
- Haidt, J. (2003). The moral emotions. In R. J. Davidson, K. R. Scherer, & H. H. Goldsmith (Eds.), *Handbook of affective sciences*. Oxford, UK: Oxford University Press. pp. 852–870.
- Immordino-Yang, M. H., McColl, A., Damasio, H., & Damasio, A. (2009). Neural correlates of admiration and compassion. *Proceedings of the National Academy of Science*, **106**, 8021–8026.
- Keltner, D., & Haidt, J. (2003). Approaching awe, a moral, spiritual, and aesthetic emotion. *Cognition & Emotion*, **17**, 297–314.
- Kemper, T. D. (1991). Predicting emotions from social relations. *Social Psychology Quarterly*, **54**, 330–342.
- Kitayama, S., Markus, H. R., & Kurokawa, M. (2000). Culture, emotion, and well-being: Good feelings in Japan and the United States. *Cognition & Emotion*, **14**, 93–124.
- Kitayama, S., Mesquita, B., & Karasawa, M. (2006). Cultural affordances and emotional experience: Socially engaging and disengaging emotions in Japan and the United States. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 890–903.
- Kruskal, J. B. (1964). Multidimensional scaling by optimizing goodness of fit to a nonmetric hypothesis. *Psychometrika*, **29**, 1–27.
- Levy, R. I. (1984). Emotion, knowing, and culture. In R. Shweder & R. Levine (Eds.), *Culture theory: Essays on mind, self, and emotion*. Cambridge, UK: Cambridge University Press. pp. 214–237.
- Li, J., & Fischer, K. W. (2007). Respect as a positive self-conscious emotion in European Americans and Chinese. In J. L. Tracy, R. W. Robins, & J. P. Tangney (Eds.), *The self-conscious emotions: Theory and research*. New York: Guilford Press. pp. 224–242.
- Li, J., Wang, L., & Fisher, K. W. (2004). The organisation of Chinese shame concepts. *Cognition & Emotion*, **18**, 767–797.
- 李 仲浜・横山 正幸 (2002a). 日本の小学生の尊敬意識についての研究 福岡教育大学紀要 (教職科), **51**, 227–236.
- (Li, Z., & Yokoyama, M. (2002a). A study on the concept and attitude of respect of Japanese elementary school children. *Bulletin of Fukuoka University of Education. Education and Psychology*, **51**, 227–236.)
- 李 仲浜・横山 正幸 (2002b). 日本と中国の子どもの尊敬意識の比較 教育実践研究 (福岡教育大学), **10**, 113–120.
- (Li, Z., & Yokoyama, M. (2002b). The comparison of respect-consciousness of children in Japan and China. *Bulletin of the Research and Guidance Center for Teaching Practice*, **10**, 113–120.)
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224–253.
- 大野 晋・浜西 正人 (1981). 角川類語新辞典 角川書店

- (Ono, S., & Hamanishi, M.)
- Ortony, A., Clore, G. L., & Collins, A. (1988). *The cognitive structure of emotions*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- de Rivera, J. (1977). *A structural theory of the emotions*. New York: International Universities Press.
- de Rivera, J., & Grinkis, C. (1986). Emotions as social relationships. *Motivation and Emotion*, **10**, 351–369.
- Rosch, E. (1975). Cognitive representations of semantic categories. *Journal of Experimental Psychology: General*, **104**, 192–223.
- Rosch, E. (1978). Principles of categorization. In E. Rosch & B. B. Lloyd (Eds.), *Cognition and categorization*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp. 27–48.
- Russell, J. A. (1980). A circumplex model of affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 1161–1178.
- 齊藤 崇子・中村 知靖 (2003). 日本人における情動概念の階層構造 九州大学心理学研究, **4**, 95–99.
- (Saito, T., & Nakamura, T. (2003). Hierarchical structure of the categories of Japanese emotion. *Kyushu University Psychological Research*, **4**, 95–99.)
- Schindler, I., Zink, V., Windrich, J., & Menninghaus, W. (2013). Admiration and adoration: Their different ways of showing and shaping who we are. *Cognition & Emotion*, **27**, 85–118.
- Shaver, P. R., Schwartz, J., Kirson, D., & O'Connor, C. (1987). Emotion knowledge: Further exploration of a prototype approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1061–1086.
- Shaver, P. R., Wu, S., & Schwartz, J. C. (1992). Cross-cultural similarities and differences in emotion and its representation: A prototype approach. In M. S. Clark (Ed.), *Review of personality and social psychology*. Vol. 13. Newbury Park, CA: Sage. pp. 175–212.
- Shiota, M. N., & Kalat, J. W. (2011). *Emotion*. 2nd ed. (International ed.) Belmont, CA: Wadsworth.
- Tracy, J. L., & Robins, R. W. (2007). The psychological structure of pride: A tale of two facets. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 506–525.

—— 2013. 6. 2 受稿, 2013. 9. 7 受理 ——